植民地の記憶

—夏目漱石『満韓ところどころ』を起点に

范淑文

✉ hansw@ms66.hinet.net

The Japanese colony of Manchuria appeared numerous times in Soseki's works: he wrote "Travels in Manchuria and Korea" (*Mankan Tokoro Dokoro*) after being invited on a tour to these colonies. Other works featuring the colonies include "The Heredity of Taste" (*Shumi no iden*), a novella that showed the naked realities of war in Manchuria, "And Then" (*Sorekara*), and "The Gate" (*Mon*), written after his tour of the colonies. This paper investigates the portrayal of Manchuria in the aforementioned novels, comparing and contrasts how the colony is depicted before and after Soseki's visit. Through this process, further understandings of Soseki's feelings towards the colony are revealed.

Keywords Memories(記憶), colony(植民地), Soseki(漱石), Manchuria(満洲), *Mankan Tokoro Dokoro*(満韓ところどころ)

1. はじめに

夏目漱石が当時満鉄の総裁を担当していた旧友中村是公に招かれ、明治41年(1908)9月始め頃に神戸を立ち、二か月弱程満洲¹及び京城などを見学したことはよく知られている。『満韓ところどころ』の題の通り、満洲と「朝鮮」での見学の内容を綴った紀行文を、朝日新聞に連載する予定であったが、連載開始間もなく、満洲を視察中だった伊藤博文が暗殺され、新聞はその記事一色となり²、『満韓ところどころ』の連載は何回も中止され、大いに影響を蒙った³。それも理由の一つだったろうが、結局、連載は満洲の見学部分にとどまり、京城など「朝鮮」の記述は見当たらず、実質的には「満洲ところどころ」⁴で作品が終わっている。後日『満韓ところどころ』の執筆のためのメモが残っている。メモに従って綴られている旅行記の内容は勿論旅行中の記憶であるのは自明なことだが、メモにありながら随筆には見当たらない、すなわち記憶から消されたのも「記憶」の一種と考えられよう。所謂「忘却」と呼ばれるもので、それが意識的か無意識的かはいずれも意味深く、作者の意図がうかがえよう。

満洲を題材にする漱石の作品といえば、『満韓ところどころ』以外に、その前に執筆した満洲で起きた戦争の生々しい句を感じさせる『趣味の遺伝』や『草枕』『それから』、またその後の『門』などが挙げられる。小稿では、これらの作品に散りばめられている満洲の描写をも考察の射程に入れ、『満韓ところどころ』を起点としてその前後の漱石の植民地へのイマージュにアプローチし、その意味合いを明らかにしてみたい。

2. 『満韓ところどころ』に見る漱石の記憶

まず、『満韓ところどころ』はどのように読まれてきたか、見てみよう。作品が発表された時に、はやくも批判の声を招いていた。

- ¹ 『満韓ところどころ』、荒正人『増補改定 漱石研究年表』(集英社、1984)などはいずれも「満洲」と表記している。本稿はそれに従う。
- ² 『門』にも次のように伊藤博文の暗殺事件が触れられている。しかし、下線部の語りから、伊藤博文の暗殺には主人公である宗助はそれほど関心を寄せていないことが伺えよう。
「おい大変だ、伊藤さんが殺された」と云つて、手に持った号外を御米のエプロンの上に乘せたなり書齋へ這入つたが、其語気からいふと、寧ろ落ち付いたものであつた。
「貴方大変だつて云ふ癖に、些とも大変らしい声ぢやなくつてよ」と御米が後から冗談半分になぞらへ注意した位である。其後毎日の新聞に伊藤公の事が五六段づゝ出ない事はないが、宗助はそれに目を通してゐるんだか、ゐないだか分らない程、暗殺事件に就ては平氣に見えた。」(『漱石全集 第6巻』367頁、下線部引用者、以下同じく)。なお、本稿の引用は『漱石全集』全28巻(岩波書店、1993-1999)に基づいている。
- ³ 1908年11月28日付寺田寅彦宛の書簡で「どうも其日の記事が輻輳するとあと廻しされる。竊に障るからよさうと思ふ」と、漱石が不満を吐露している。
- ⁴ 久保尚之は「そこで『満韓ところどころ』は『漱石ところどころ』といわれるのである。」と語っている。久保尚之『満洲の誕生 日米摩擦のはじまり 丸善ライブラリー184』(丸善株式会社、1996)、p.206。

北の方のSといふ人がわざわざ書を余のもとに寄せて、長塚君が旅行して彼と面会した折の議論を報じた事がある。長塚君は余の「朝日」に書いた「満韓ところどころ」といふものをSの所で一回読んで、漱石といふ男は人を馬鹿にして居るといつて大いに憤慨したさうである。漱石に限らず一体「朝日」新聞の記者の書き振りは皆人を馬鹿にして居ると云つて罵つたさうである⁵。

以上は漱石が長塚節の『土』に寄せた序文の一節であるが、『満韓ところどころ』に対する長塚節からの厳しい批判に漱石が言及している。おそらく、植民地における日本人の努力の成果、開発振りである満鉄事業を、旧友との思い出を混じえながら散文体で紹介したという漱石の扱い方、描写態度を、長塚節は認められず、軽率な行いだと言友人に不快を吐いたのであろう。

時代が経つに連れ、瀬沼茂樹や江藤淳など長塚節と異なった立場、見解の研究者が現れてきた。

- (1) 満州経営に活動する日本人の言行を讃美したりするところはなかった。むしろ知人関係者との応接をたのしみ、胃カタルに苦しみながらも、満州の風物に好奇心を燃やし、軽妙な読物とすることを心がけていた。言いかえると、漱石は好むがままに率直に感想をのべ、日本人の進取の気象を認めながらも、植民地主義のような空言空論を上下しないところに、むしろ愛国者としての面目があった⁶。
- (2) 九年前の英国留学とはこと異り、いずれにせよこれは成功者の旅というべき大名旅行であった。中村是公が「総裁」になったのが大成功なら、その「総裁」に招かれて満韓を旅する漱石とて成功者でないことはない。大学を辞めて小説記者にはなったものの、今の漱石は只の小説記者ではなくて「総裁」の客である。いや、今や彼は「東京朝日」一社を超えて、明治文壇を代表する作家の一人にほかならない⁷。

(1)は瀬沼茂樹の見解で、「愛国者としての面目」があると上掲の長塚節と全く違う考え方を示している。(2)は江藤淳が「『総裁』の客」と題した論文の一節で、今回の「満洲」「朝鮮」の旅と明治33年の英国留学の経験とは、心境的にも待遇的にも大きく異なっており、文壇で既に盛名を馳せている状況での漱石の満洲の旅は、「大名旅行」であると、やや揶揄っぽい言い方を用いている。

とは言え、『満韓ところどころ』をネガティブな立場で読む研究者は絶えない。

- (1) 『満韓ところどころ』には一句も、日本軍国主義による中国東北への侵略を責

⁵ 『漱石全集』第16巻, p.496.(引用にある踊り字を仮名で表記している。以下同じく)。

⁶ 瀬沼茂樹『夏目漱石』(東京大学出版会, 1980), pp.174-175.

⁷ 江藤淳『漱石とその時代』第四部(新潮社, 1995), p.275.

める言葉が見られない。また中国や中国の苦しみ悩んでいる人民に対する同情をみるのもむずかしい。(中略)『満韓ところどころ』には、漱石の中国人に対する軽視、嫌悪がしばしば吐露されている。(中略)「汚ない支那人」「汚ない国民」などの言葉が随所に見られる。漱石の目には、中国人は単に食物や衣類や住居や環境が不満だけではなく、国民全部が汚く、同時に「支那人は実に狡猾」だった⁸。

(2)「満韓ところどころ」で中国人はおおむね、不気味で不潔で残酷で、対話の通路を一切持てない、忌避すべき他者のイメージで描かれている。このく不気味な土着民の姿を、このエッセイの冒頭に描かれている若いイギリス副領事の「美しい」「優美」「(二)な肢体や所作への嘆賞に對置してみれば、事態はより明かだ⁹」。

(1)は呂元明の論説で、中国や中国人への描写をそのまま捉えており、中国、中国人への漱石の差別の眼だと見なしている。最も徹底的な批判だと言えよう。(2)は北川扶生子の説で、やや批判的な目で捉えている点も見られるが、わりと客観的な立場による論究であろう。

一方、例えば、伊豆利彦¹⁰は早くから表面の描写に囚われず、その不可視的な¹¹、漱石の人道的な眼差しを見出している。

『満韓ところどころ』の第一回目の冒頭には「南満鉄道会社つて一体何をするんだいと真面目に聞いたら、満鉄の総裁も少し呆れた顔をして」「まあ、海外に於る日本人がどんな事をしてゐるか、ちつと見て来るが可い」(『漱石全集 第12巻』p.227)というのがある。この一節から、南満鉄道会社など日本人の満洲、「朝鮮」等の地における開拓事業の状況を認識し、その文筆を通して日本の国民に大いに宣伝するというのが漱石の満洲行きの目的であったと理解してよいだろう。海外で日本の勢力が広がり、その建設が進められていた当時の社会状況のもと、『満韓ところどころ』は文学的意義より政治的意義が大きく、そうした空気を漱石も感づいていたに違いなかった。

『満韓ところどころ』の内容を調べてみれば、電気会社、製油所、製糸所、大連医院、発電所、川崎造船所などの事業、または電気公園やクラブなどの娯楽施設も記述されている。これらはいずれも一つの新しい日本人社会の運営における重要な基盤であり、招待してくれた満鉄総裁である中村是公をはじめ、当時の日本全国の期待に十分に応えたと言えよう。

⁸ 呂元明「夏目漱石『満韓ところどころ』私見」(『近代日本と「偽満洲国」』編集代表：西田勝、不二出版、1997)、pp.275-276。

⁹ 北川扶生子「失われゆく避難所『門』における女・植民地・文体」(『漱石研究』17号、編集：小森陽一・石原千秋、翰林書房、2004)、p.85。

¹⁰ 伊豆利彦「『満韓ところどころ』について—漱石におけるアジアの問題—」(『近代文学における中国と日本—共同研究 日中文学関係史—』、編者：祖父江昭二・丸山昇、汲古書院、1986)。

¹¹ 拙稿「〈異郷〉としての大連—漱石に語られる「満洲」像」(『〈異郷〉としての上海・大連・台北』和田博文・黄翠娥編著、勉誠出版、2015、pp.64-77)も上掲の伊豆利彦と同じく、『満韓ところどころ』にある作者の満洲への不可視的な眼差しを見出そうと図った論考である。

その一方で、現地人社会に目を向けた描写を見落としてはなるまい。例えば大連に着いた時、真っ先に「余」の目についた「鳴動し」ているクーリーたちや製油所で黙って働いているクーリーたちの姿、奉天の町で馬車に轢き逃げられた老人の描写、旅順の戦利品や陳列所などの見学の場面は果して招待者である満鉄総裁側の立場から海外で日本人が奮起する姿を賞賛し、支配者として誇りを持っていると言いきれるであろうか、疑わしい。先ず、クーリーの姿を見てみよう。

- (1)クーリー団は、怒つた蜂の巣の様に、急に鳴動し始めた。(略)何しろ早晚地面の上へ下りるべき運命を持つた身体なんだから、(略)其処へ脊の高い、紺色の夏服を着た立派な紳士が出て来て、懷中から名刺を出して丁寧に挨拶をされた。それが秘書の沼田さんだつたので、(後略)『漱石全集』第12巻(pp.234-235)(下線引用者、以下同じく)
- (2)上るものと下りるものが左右の坂の途中で顔を見合せても殆んど口を利いた事がない。彼等は舌のない人間の様に黙々として、朝から晩迄、此重い豆の袋を担ぎ続けに担いで、三階へ上つては、又三階を下るのである。(略)この中に落ちて死ぬことがありますかと、案内に聞いたら、案内は平気な顔をして、まあ滅多に落ちる様な事はありませんねと答へたが、余はどうしても落さうな気がしてならなかつた。『漱石全集』第12巻(pp.266-267)

(1)は船が大連の港に着いた時語り手の目についた風景で、(2)は「余」が製油所で見た現地の人の働きぶりである。いずれもクーリー、つまり満洲人であり、上掲した呂元明が指摘した「汚ない」¹²というイメージがあることは否定できないが、氏が云う「汚い支那人」という軽蔑めいたほどの捉えかた¹³には賛同しがたい。『満韓ところどころ』に対する評価、即ち満洲で「新氣象」として「余」の目に映った統治者である日本人の振る舞いやクーリーたちの身なり及び彼等の日常生活の描写は近年見直されている。例えば、紅野敏郎の「憂うつな表情が散見できる」「満洲の現地の民の表情も鋭く心にとめている」¹⁴というやや遠慮深い見解もあれば、「そこに漱石の“人種差別”的な差別感はない」¹⁵という、語り手の「支那のクーリー」への眼差しを見出す川村湊の評価も挙げられる。こうした傾向は即ち、文字の表層にとどまらず、より客観的な視座よりその不可視的な部分を見出そうという姿勢の研究と見なしてよからう。

上掲(1)にあるクーリーたちは一見「紺色の夏服を着た立派な紳士」に見えた秘書であ

¹² 呂元明、上掲。

¹³ 久保尚之は露出しているクーリーの筋肉の描写に対して軽蔑どころか、「ここにいたっては、ホモセクシャルさえ感じさせる。そして差別どころか惚々と漱石は見とれている。」というホモセクシャル的、賛美的な捉え方を示している。(久保尚之『満洲の誕生 日米摩擦のはじまり 丸善ライブラリー184』丸善株式会社、1996、p.209)。

¹⁴ 紅野敏郎「明治・大正文学における中国像 概説」(『近代日本文学における中国像』編者：村松定孝・紅野敏郎・吉田熙生、有斐閣、1975)、p.7。

¹⁵ 川村湊「『帝国』の漱石」(『漱石研究』5号、翰林書房、1995)、p.36。

る沼田さんとの対照的な設定を通して、汚い人種である特徴が一層目立ち、その外見を伝えようとする描写が目的のように見える。が、「怒つた蜂の巣の様に、急に鳴動し始めた。」という語りから、落ち付かない環境に置かれている、個の存在が許されない、怒りに満ちた人たちの内面がうかがえる。さらに、「何しろ早晚地面の上へ下りるべき運命を持った身体」という描写を通して、逆らえない、変えられない被支配者の暗い運命を訴えている語り手の彼ら——満洲人——への一種の眼差しと捉えることができるだろう。

次に、(2)に掲げている、製油所で必死に働いているクーリーたちの単純な動きへの細やかな描写から、語り手の被支配者への眼差しが一層はつきりしてくる。「舌の無い人間の様に黙々として朝から晩迄、此重い豆の袋を担ぎ続けに担いで、三階へ上つては、又三階を下る」という繰り返される機械的な動きは、人生に希望が見えない人間の辛さ、暗い運命を物語っている。「彼等は舌のない人間の様に黙々として」という描写が如何にも彼らの心理や境遇をよく反映していると言わざるを得ない。そうしたクーリーの安全を心配している語り手に「この中に落ちて死ぬことがありますか」と質問された時、「まあ滅多に落ちる様な事はありませんね」という案内係の日本人の軽々しい答えを盛り込んだのは、支配者の非人道的な一面を曝け出そうとする作者の意図的な作為ではなかろうか。

語り手の被支配者への眼差しはさらに続く。奉天の町で、馬車に轢き逃げられた老人が賑やかな通りに坐って「其右の膝と足の甲の間を二寸程、強い力で刳り抜いた様に、脛の肉が骨の上を滑つて、下の方迄行つて、一所に縮れ上つてゐる」(336頁)傷を曝している生々しいシーンは、最も印象的な場面であろう。「黒くなつて集つた支那人はいづれも口も利かずに老人の創を眺めてゐる」という表現では、一見仲間に助けの手を差し伸べない支那人に対する批判と捉えられるかも知れない。が、「その加害者は日本人の乗っていた馬車ではなかったらうか。」¹⁶という、被統治者への漱石の眼差しを見出した伊豆利彦の指摘のとおり、その現象の背後に潜んでいる事故を引き起こした人間、そのキャラクターまでを見詰めなければ事件が背負う真相、作者の真の狙いは見えてこない¹⁷。轢き逃げされた老人が皆の前に自分が蒙った災難を見せているのは、内地からの一人である語り手に、海外で開拓している日本人の横暴な行為を訴えようとしている行為でなければ何であろうか。そのような満洲人に焦点を合わせたこと、彼らへの細やかな描写などはいずれも作者の満洲外遊中深く記憶に刻まれたシーンであったことはいうまでもない。そして、そのような記憶の再現、クローズアップが即ち作者のヒューマニズムな一面そのものであろう。

また、旅順にある戦利品陳列所を見学している場面での語り手の姿勢や眼差しも見落

¹⁶ 伊豆利彦「『満韓とところどころ』について——漱石におけるアジアの問題——」(『近代文学における中国と日本——共同研究・日中文学関係史——』祖父江昭二・丸山昇編、汲古書院、1986)、p.179。

¹⁷ 伊豆利彦は、更に、「中国の民衆は抗議の声すらあげず、権力と金力の横暴をじっと見つめて耐えている。その沈黙、その静かさが無気味である。たしかに、漱石は無言の圧力を感じないではいらなかったはずである。」と執筆中の漱石の心理状態を語っている。(伊豆利彦、上掲書、p.179)。

としてはなるまい。案内役のA君が親切に説明してくれた戦利品を作品で逐一紹介しようとするなら、「二十枚や三十枚の紙数では足るまい」(281頁)程の内容はあったが、「大抵忘れて仕舞つた」という一言で忘却の中に仕舞い込み、それについての陳述をほとんど省いている。戦争の勝利者側にしてみれば、例えば「手投弾や、鉄条網」などのような戦利品の紹介は国力の宣伝には絶好の機会になるはずだが、ここでは語り手の意図的な忘却が働いているとしか思えない。しかし、不思議にその代りに「たつた一つ覚えてあるものがある。夫は女の穿いた靴の片足である」(281、282頁)と語っているのは意味深い。A解説員によれば、それはあるロシアの士官の妻が履いていた靴で、その靴の色や形までをいつになっても「鮮やかに思ひ浮かべる」(282頁)と語り手がはっきりと記憶している。士官の妻が恐らく戦で逃げている際、片方の靴が脱げたと想像できるだろう。脱げた靴を履き直す暇もない程、夫人の慌ただしかった姿、恐怖の気持などが感じられるのであろう。こうした戦利品の忘却及び戦場に残された女の「靴の片足」という「記憶」は戦争による不可視的な破壊力やその傷痕を語ると同時に戦争の勝利に背を向けたという漱石の姿勢をも感じとることができるのである。

3. 『趣味の遺伝』・『草枕』・『それから』に織り込まれている満洲

さて、先に触れたように漱石が満洲へ行く前にも満洲を題材にした作品、または満洲を散りばめた作品が幾つかある。先ず、最も戦争の匂いの強い『趣味の遺伝』は今回の戦争で先頭に立ち、旗手を務めていた親友である浩さんの日記——死ぬ寸前までの戦場で過ごした毎日の記録——に頼りながら戦場だった満洲の惨たらしさを描いた作品である。その一節を掲げよう。

戦争はまのあたりに見えぬけれど戦争の結果を——慥かに結果の一片、然も活動する結果の一片が眸底を掠めて去つた時は、此一片に誘はれて満洲の大野を蔽ふ大戦争の光景がありありと脳裏に描出せられた。(『趣味の遺伝』『漱石全集』第2巻、p.191)
(踊り字を現代仮名に変更した。以下同じく)

〈凱旋者〉を迎える場面——英雄として迎えられる生還者らが皆疲れ切った姿で現れる場面——が眼に入った瞬間、語り手がどうしても戦場だった満洲の悲惨な光景を想像し、その結果に至るまでの戦場を細やかに読者に語りかけずにはいらなかったのである。

更に、今回の戦場で最も生々しく語られている最前線の塹壕のシーンを見落としてはならない。

石を置いた沢庵の如く積み重なつて、人の眼に触れぬ坑内に横はる者に、向へ上がれと望むのは、望むものゝ無理である。横はる者だつて上がりたいだらう、上がりたければこそ飛び込んだのである。いくら上がりたくても、手足が利かなくては上がれぬ。眼が暗んでは上がれぬ。胴に穴が開いては上がれぬ。血が通はなくなつても、脳味噌が潰れても、肩が飛でも身体が棒の様に鯢張つても上がる事は出来ん。(『漱石全集』第2巻, p.204)

主人公である浩さんが死んだ時の戦場の惨たらしい光景である。誰よりも勇敢で強い浩さんもうとうと塹壕から「上がれる事が出来」なかった。「手足が利かなくては上がれぬ。」「眼が暗んでは上がれぬ。」などのように、塹壕から二度と上がれない意味の表現がこの一節で十回程繰り返されている。戦争の勝利を獲得しようとするためにどれ程の無残な行いを迫られるか、本人が「向へ上がれと望」んでいても——生きていきたいと願望しても——上がれないという描写から、「戦争を、人類の避けることのできない災害である」¹⁸という伊藤整の漱石の戦争観への捉え方には賛同しがたい。敗戦であろうか、勝利であろうか、戦争が持つ破壊力や戦士やその家族や遺族の逆らえない空しさを描くことを通して漱石は戦争への反対の立場を仄めかしているのではなからうか。時代の背景で戦争そのものを真正面から批判できなかったであろうが、戦争の勝利を称える表現は『趣味の遺伝』では一つも見当たらず、命を捨てざるを得なかった沢山の戦士たちの運命という不可視的な無残な過去を語り手がここで凝視し、真実を語ろうと必死に努めたのである。

半年後に書かれた『草枕』にも満洲での戦争がさりげなく織り込まれている。住みにくい世の煩わしさを遁れようと「夢の様な詩の様な春の里」である奥山の温泉地那古井まで主人公の画工がやってきた。が、場所を問わず、この美しい「孤村に迄逼」ってくる残酷な戦争という現実を画工は改めて認識させられる。第八章では、ヒロイン那美さんの従弟久一が戦地である満洲に行かされることを那美さんの父親が主人公の画工及び大徹和尚に話している。

老人は当人に代つて、満洲の野に日ならず出征すべき此青年の運命を余に語げた。此夢の様な詩の様な春の里に、啼くは鳥、落つるは花、湧くは温泉のみと思ひ詰めて居たのは間違である。現実世界は山を越え、海を越えて、平家の後裔のみ住み古したる孤村に迄逼る。朔北の曠野を染むる血潮の何万分の一かは、此青年の動脈から迸る時が来るかも知れない。(略)運命は卒然として此二人を一堂のうちに会したるのみにて、其他には何事をも語らぬ。(『漱石全集』第3巻, pp.105-106)

¹⁸ 伊藤整は新潮文庫『倫敦塔・幻影の盾』の解説で、「彼ははっきりした反戦論者ではなかったから、戦争には反対しなかった。彼は戦争を、人類の避けることのできない災害であるという風に考えていたようである。そして戦争が始まった以上、勝つことを喜んではいた。けれども、その戦争の間に失われる人命、戦場で味わわれる労苦に対しては、彼は痛切な感動を味わった。」と、漱石の戦争への姿勢を語っている。(伊藤整『倫敦塔・幻影の盾』新潮社, 1997年, p.222).

この桃源郷と思われる温泉地那古井の和やかな雰囲気とは対照的に、御茶会の席上で満洲が話題に上った一節である。「血潮」が「曠野を染むる」凄まじい場として満洲が語られている。物語の終盤に、いよいよ久一及び那美の離縁の夫——落ちぶれたようなみすぼらしく見える「野武士」——が同じ汽車に乗って満洲に向かう。この名場面は那美さんの心境以外に、満洲が如何なる場所であるのかがよく物語られている。

是からさう云ふ所へ久一さんは車のなかに立つて無言の儘、吾々を眺めて居る。
(略)茶色のはげた中折帽の下から、髯だらけな野武士が名残り惜気に首を出した。
そのとき、那美さんと野武士は思はず顔を見合わせた。鉄車はごとりごとりと運転する。野武士の顔はすぐ消えた。那美さんは茫然として、行く汽車を見送る。(『漱石全集』第3巻, pp.170-171)

村人に「狂気」と言われる那美さんでさえ、満洲に向かう汽車に乗っている離縁した夫と顔を合わせた瞬間、「茫然」としている。満洲という戦場に赴く人も、彼等を見送る人々も明るい顔——国の英雄という輝かしい雰囲気——を見せる者は誰一人もいなかった。父子、御爺さんと孫、別れた夫妻などの切ない表情やその無言さが戦争の恐ろしさを切実に物語っている。この終盤の名場面からも、満洲はただただ死につながる惨たらしい場の象徴として語られていると読み取れよう。

次に満洲旅行に出発する直前に完成した『それから』に目を移してみよう。満洲に触れているのは第11章の一節のみである。

赤い眼をしきりに摩つた。代助を見て、突然、人間は何うしても君の様に独身でなけりや仕事は出来ない。僕も一人なら満洲へでも亜米利加へでも行くんだが大いに妻帯の不便を鳴らした。三千代は次の間で、こつそり仕事をしてゐた。(『漱石全集』第6巻, p.184)

三千代が百合の花を持参して代助のうちを訪れた数日後、代助が平岡夫婦に会いに行っている場面である。新聞社の方で仕事がほぼ決った平岡は、代助の自由な生活と比べ、「一人なら満洲へでも亜米利加へでも行く」と、「妻帯の不便」を漏らしているのである。妻がいると満洲へ行けないというのは、一種の気掛りがあるからである。言い換えれば、満洲へ行くとは、失敗、あるいは帰って来られないというリスクが伴っている危ないところにつながるとも捉えることが出来よう。それでも平岡にとっては行く価値がある、行ってみたいところであり、自己の存在が見える、一種の魅力がある場所なのであろう。

4. 『門』に描かれている満洲

さて、『満韓ところどころ』の次の作品、つまり実際に自分の目で満洲を見て来た後の作品『門』においては、満洲はどのように捉えられているのであろうか。

「わたしは『門』前半の主題(と言って不正確ならば、前半に賭けた作者の意図)は、やはり『夫婦愛』の物語を書くところにあつたと考える。」¹⁹という重松泰雄の指摘のように、『門』は三部作の一部という位置づけに基づいて男女の恋愛物語²⁰とする読み方がほぼ定着しているが、近年例えば、押野武志²¹、北川扶生子²²、柴田勝二²³、五味渕典嗣²⁴など植民地や支配者と被支配者の視点より捉える研究者も少なくない。

では、満洲が言及されている場面を抜粋して次に掲げておこう。

(1)「もし駄目なら、僕は学校を已めて、一層今のうち、満洲か朝鮮へでも行かうかと思つてゐるんです」

「満洲か朝鮮?ひどく又思ひ切つたもんだね。だつて、御前先刻満洲は物騒で厭だつて云つたぢやないか」(『漱石全集』第6巻, p.372)

(2)日露戦争後間もなく、主人の留めるのも聞かずに、大いに発展してみたいとかとなへて遂に満洲へ渡つたのだと云ふ。(中略)驚ろきましたね。蒙古へ這入つて漂流してゐるんです。何処迄山気があるんだか分からないんで、私も少々剣呑になつてゐるんですよ。(『漱石全集』第6巻, p.550)

(3)安井は体から云つても、性質から云つても、満洲や台湾に向く男ではなかつたからである。(中略)彼等は安井を途中で退学させ、郷里へ歸らせ、病気に

19 重松泰雄「『門』の意図」(『漱石作品論集成』第七巻, 編者:赤井恵子・浅野洋, 桜楓社, 1991), p.77.

20 佐藤泰正は「言わば作者のねらいは牧歌的な夫婦愛の情趣を描くとみせて、実はその底に横たわる——自明の日常が不意に不定形なかたちでゆらぎ出す〈存在〉そのものの不気味さを呈示する。」と夫婦愛の情趣としても読んでいる。(佐藤泰正「『門』——〈自然の河〉から〈存在の河〉へ——」(『漱石作品論集成』第七巻, 編者:赤井恵子・浅野洋, 桜楓社, 1991), p.144)

21 押野武志は「植民地的な小説空間の中で、偶然と運命とスキャンダルを描いた『門』は、地味な中年小説などではなく、明治末の時代をも映し出す冒険小説の条件を十分に備えている。」と、宗助夫婦の過去の過ちによって置かれた現在の生活空間を植民地的要素の象徴と喩えている。(押野武志「『平凡』をめぐる冒険『門』の同時代性」『漱石研究』17号, 編集:小森陽一・石原千秋, 翰林書房, 2004, p.48)

22 北川扶生子は「『門』に繰り返し苦悶する女の身体が描かれる理由を、掲載紙『東京朝日新聞』の紙面を窓口に、宗助の〈男らしさ〉への不安や、彼にとっての植民地のイメージ、漢学を中心とする男性的教養の凋落と『門』に用いられる文体の関係を検討することから考えてみたい。」とあるように主人公の付与された条件などから両者の関係——支配者と被支配者の関係を論証している。(北川扶生子「失われゆく避難所『門』における女・植民地・文体」『漱石研究』17号, 編集:小森陽一・石原千秋, 翰林書房, 2004, p.78)

23 柴田勝二は「この構図では主人公の代助が友人の平岡から奪おうとする三千代が、領土としての〈韓国〉を表象するのに対して、その間にあって代助に対する批判者となる平岡は、植民地に抵抗しようとする義兵に象徴される韓国民衆を象っていた。」と主人公の関係を植民関係としてみなしている。(柴田勝二『漱石のなかの〈帝国〉——国民作家と近代日本——翰林書房, 2006, p.147).

24 五味渕典嗣は「『門』の世界では、登場人物たちが何の気なしに考えつくほどの心理的な近さで、コロニアルなものが存在しているのである。」という見解を示している。(五味渕典嗣「占領の言説、あるいは小市民たちの帝国『門』と植民地主義を考えるために」『漱石研究』17号, 編集:小森陽一・石原千秋, 翰林書房, 2004, p.50).

罹らせ、もしくは満洲へ駆り遣つた罪に対して、如何に悔恨の苦しみを重ねても、何うする事も出来ない地位に立つてゐたからである。（『漱石全集』第6巻、p.554）

（1）は小六が学資の援助を伯母に交渉するよう兄の宗助に頼んでいたが、全然話が進まなかったことを聞いたあと、開き直つたような態度を示した場面である。小六、おそらく宗助にとっても満洲は「物騒」で一般の人が行こうともしないところなのである。学校へ行かせてもらえそうもない、つまりその先が見えない立場に立たされた時、小六は敢えて満洲での発展を思い立ったのである。（2）は大家である坂井の弟が兄の反対を押し切って満洲へ赴き、更にモンゴルへ渡つたことが語られている。その満洲行きの目的は「大いに発展してみたい」という当人の説明はあるが、坂井は「^{アドベンチャー}冒険者」と力強く繰り返し、「今迄もよく法螺を吹いて私を欺したもんです。」と批判めいた口調で弟のことに言及している。そして、宗助夫婦に裏切られたことで人生がすっかり狂ってしまった宗助の親友である安井も大家のその弟と一緒に満洲から帰ってくると宗助は告げられる。そのような安井と満洲との関係について、（3）にあるように、「体から云つても、性質から云つても、満洲や台湾に向く男ではなかつた」と宗助が回想しながら語っている。更に、「彼等は安井を途中で退学させ、郷里へ帰らせ、病気に罹らせ、もしくは満洲へ駆り遣つた罪に対して」とあるように、満洲へ行かせたのは一種の罪と迄感じられたのである。罪につながる程満洲行きは、「斯様に、墮落の方面をとくに誇張した^{アドベンチャー}冒険者を頭の中で拵え上た」と、宗助は想像している。

小六の満洲行き提案への宗助の反応、大家である坂井の弟の性格や置かれた状況、また坂井の弟への評価、及び安井に関する宗助の言及などを合わせて考えれば、満洲という所は「物騒」な所で、割り切らないと行けない所、極端な場合は人を騙したりする人、墮落につながる「^{アドベンチャー}冒険者」が集まる所、という満洲像が幾重にも浮き彫りにされてくる。漱石の満洲「朝鮮」旅行から半年以上も経った時期——開墾や経営などが相当進んでいる状況——に、発展する可能性も有りうるが、満洲と関わっているキャラクターの設定からでは、内地つまり日本で落ちこぼれながら相当忍耐力の強い人でなければ行く勇気がない、未知でスリルに満ちた〈異郷〉というマイナス的なイメージの強い満洲像が『門』では作られている。そしてこのような文脈の中、「安井とは、幸福な夫婦の不安の象徴としての存在だ」という内田道雄²⁵の見解に従えば、満洲はすなわち不安の象徴と捉えられないこともない。

²⁵ 内田道雄「門」をめぐる——夏目漱石論（二）（『漱石作品論集成』第七巻、赤井恵子・浅野洋編、桜楓社、1991）、p.25。

5. 結び

明治38(1905)年10月に日露戦争が終り、その後『趣味の遺伝』、『草枕』、そして『それから』が続いて発表された。『それから』の脱稿直後、漱石は満洲へ行き、二か月弱程満洲と「朝鮮」を旅行し、帰国後直ちに『満韓ところどころ』を執筆した。しかし、連載二日後、伊藤博文が暗殺され、予定より早く『満韓ところどころ』にピリオドを打った。その後明治43(1909)年3月より『門』の連載が始まった。こうした文学史的流れを満洲旅行を中心に考察を加えると次のような漱石の満洲像が浮き彫りになってくる。

(1) 満洲外遊前——想像の満洲像

(A)『趣味の遺伝』で凱旋者の歓迎会に現れた疲れ切った生還者の姿や残された戦場での日記を通して、命を捨てざるを得なかった戦士たちの運命という不可視的な過去を語り手がここで凝視している。それに引き続き、(B)『草枕』では「血潮」が「曠野を染むる」凄まじい場、満洲行きの汽車に乗っている青年及び「野武士」の沈んだ顔、不透明な未来への不安、切ない表情などを通して、ただただ死につながる惨たらしい場の象徴として満洲が語られている。(C)『それから』においては、失敗、あるいは帰って来られないというリスクが伴っている危ないところにつながる場所として満洲が捉えられているが、一方、一部の人間にとってはそこで個の存在が認められる、という一種の魅力も感じられる。

(2) 満洲外遊——記憶の再構築による満洲像

『満韓ところどころ』という旅行記には招待側である中村是公満鉄総裁の期待に応え、海外で開拓している日本人の奮闘振りをたっぷり宣伝している一方、「舌のない人間」のようなクーリーや轢き逃げされた老人へのクローズアップという手法で被支配者への眼差しを示しながら、支配者の非人道的な一面を批判している。そのような設定は作者の旅行の「記憶」のリアルな再現であるとともに、ヒューマニズムの現れとも思われる。つまり満洲の記憶の再構築によって漱石の満洲像——日本人の進取の気象の裏にみえる満洲人の惨たらしい姿——が浮き彫りになったのである。

(3) 満洲外遊後——篩いかけられた記憶によって再確認された満洲像

満洲外遊から半年立った後の『門』においては、満洲の発展への夢が与えられながらも、ギャンブル同然のスリルに満ちた〈異郷〉、つまり野性的な雰囲気などマイナス的なイメージの強い満洲像が描かれている。漱石の満洲外遊の「記憶」が半年という時間を経

て凝縮され、追体験された後、再認識され、強い不安の象徴として新たに息を吹き込まれた満洲像が築かれたのではなかろうか。

参考文献

- 荒正人(1984)『増補改定 漱石研究年表』, 東京: 集英社. AraMasahito(1984). *Zohokaitei Soseki Kenkyunenpyou*. Tokyo: Syueishya.
- 伊豆利彦(1986)「『満韓ところどころ』について—漱石におけるアジアの問題—」(『近代文学における中国と日本—共同研究・日中文学関係史—』, 祖父江昭二・丸山昇編, 東京: 汲古書院. IzuToshihiko(1986). *Mankan Tokorodokoro ni tsuite: Soseki ni Okeru Ajia no Mondai In Kindai Bungaku ni Okeru Chyugoku to Nihon: Kyoudou Kenkyu-Nichyu Bungaku Kankeisi*, edited by Shyouji Sohue and Noboru Maruyama. Tokyo: Kyuko Soin
- 伊藤整(1997)『倫敦塔・幻影の盾』, 東京: 新潮社. Ito Sei(1997) *Rondon Tou /Genei no Tate*, Tokyo: Sinkyosha
- 内田道雄(1991)「『門』をめぐる——夏目漱石論(二)』『漱石作品論集成【第七巻】』, 赤井恵子・浅野洋編, 東京: 桜楓社. Uchida Michio(1991) “‘Mon’ wo Megutte: Natsume Soseki Ron (2). In *Soseki Sakuhinron Shyusei* (7), edited by Keiko Aki and Hiroshi Asano. Tokyo: Ohushya
- 押野武志(2004)「『平凡』をめぐる冒険 『門』の同時代性』『漱石研究』17号, 小森陽一・石原千秋編, 東京: 翰林書房. Oshino Takeshi(2004) “‘Heibon’ wo Meguru Boken “Mon” no Doujidaisei In *Soseki Kenkyu*(17), edited by Yoichi Komori and Chiaki Ishihara. Tokyo: Kanrin Shobou
- 川村湊(1995)「『帝国』の漱石』『漱石研究』5号, 小森陽一・石原千秋編, 東京: 翰林書房. Kawamura Minato(1995) *Teikoku no Soseki In Soseki Kenkyu*(17), edited by Yoichi Komori and Chiaki Ishihara. Tokyo: Kanrin Shobou
- 北川扶生子(2004)「『失われゆく避難所 『門』における女・植民地・文体』『漱石研究』17号, 小森陽一・石原千秋編, 東京: 翰林書房. Kitagawa Hukiko(2004) *Ushinawareyuku Hinanryo “Mon” ni Okeru Onna /Shyokuminchi /Buntai In Soseki Kenkyu*(17), edited by Yoichi Komori and Chiaki Ishihara. Tokyo: Kanrin Shobou
- 久保尚之(1996)『満洲の誕生 日米摩擦のはじまり 丸善ライブラリー184』, 東京: 丸善株式会社. Kubo Naoyuki(1996) *Manshyu no Taniyou Nichibeimasatsu no Hajimari Maruzen Raiburari-184*. Tokyo: Maruzen Kabushikigaisha
- 紅野敏郎(1975)「明治・大正文学における中国像 概説』『近代日本文学における中国像』, 村松定孝・紅野敏郎・吉田熙生, 東京: 有斐閣. Kono Toshiro(1975) *Meiji/Taishyo Bungaku ni Okeru Chyugokuzo Gaisetsu “Kindai Nihon Bungaku ni Okeru Chyugokuzo”*, edited by Sadataka Muramatsu and Toshio Kono and Kisei Yoshida, Tokyo: Yuhikaku
- 五味潤典嗣(2004)「占領の言説、あるいは小市民たちの帝国 『門』と植民地主義を考えるために』『漱石研究』17号, 小森陽一・石原千秋編, 東京: 翰林書房. Gomibuchi Noritsugu(2004) *Senryo no Gensetsu. Anriha Shyoushimin Tachi no Teikoku “Mon” to Shyokuminchi Shugi wo Kangaeru Tame ni In Soseki Kenkyu* (17), edited by Yoichi Komori and Chiaki Ishihara. Tokyo: Kanrin Shobou
- 佐藤泰正(1991)「『門』——〈自然の河〉から〈存在の河〉へ——』『漱石作品論集成【第七巻】』, 赤井恵子・浅野洋編, 東京: 桜楓社. Sato Yasumasa(1991) “‘Mon’: ‘Sizen no Kawa’ kara ‘Sonzai no Kawa’ he In *Soseki Sakuhinron Shyusei* (7), edited by Keiko Akai and Hiroshi Asano. Tokyo: Ohushya
- 柴田勝二(2006)『漱石のなかの『帝国』—国民作家と近代日本—』, 東京: 翰林書房. Shibata Shyoji(2006) *Soseki no Naka no “Teikoku”: Kokumin Sakka to Kindai Nihon*. Tokyo: Kanrin Shobou

- 范淑文(2015)「〈異郷〉としての大連——漱石に語られる「満洲」像」『〈異郷〉・大連・台北』, 和田博文・黄翠娥編, 勉誠出版. Fan Shu-Wen(2015) 'Ikyou' toshite no Dairen: Soseki ni Katarareru 'Manshyu' zo In 'Ikyou/Dairen /Taipei, edited by Hirohumi Wada and Suiga Ko.Tokyou:Bensei Shyupan
- 呂元明(1997)「夏目漱石『満韓ところどころ』私見」『近代日本と「偽満州国」』, 編集代表: 西田勝、東京: 不二出版. Ro Gen-Mei(1997) Natsume Soseki "Mankan Tokorodokoro" Siken In *Kindai Nihon to 'Gimanshyu Koku*, edited by Nishida Masaru. Tokyou : Hujishyuppan Memories of the Colony-Beginning with Natsume Soseki's "Travels in Madhuria and Korea(Mankan Tokoro Dokoro)"

范淑文 Shuwen FAN

(台湾)台湾大学日語日文学科教授。日本近現代文学、台湾文学。「代助と三千代の恋——『それから』に語られている(時代)」(『日本学研究叢書26 漱石と(時代)——没後百年に読み拓く』台湾大学出版中心, 2018)、「川端文学と絵画の交響——「白馬」を例として」(『台大日本語文研究』32輯, 台大日文系, 2017)、「文人の系譜——王維~田能村竹田~夏目漱石」(東京:三和書籍, 2012)など。